Hikari High School Alumni association

光潮会報

山口県立光高等学校 光潮同窓会

第67号
平成26年8月

もくじ

感謝することの大切さ……守田義昭　3
ご挨拶……小林真理　4
関東支部だより……藤井政道　5
関西支部だより……鎌田誠　8
平成26年年度総会・懇親会の開催にあたって……田村亨　9
スポーツ指導者鼎談……10
今も日曜は朝6時から草野球を楽しんでいます……18
部活動の足跡……22
大学・短大等の合格者数（過去六年）……27
就職状況……29
光高校歌・室女校歌みたらい学園歌・光中校歌……30
平成25・26年度光潮同窓会役員……31
編集後記……31

平成二十六年度 光潮同窓会総会のご案内

日　時　平成二十六年八月十六日(土)
十一時～

場　所　ホテル松原屋
光市虹ヶ浜三丁目九―十六
（電話〇八三三―七一―〇〇四七）

次　第
11時～11時30分　総会
11時45分～14時　懇親会

会　費　三千円

本年の当番幹事は、卒業年次の末尾の数字が、昭和は4と9、平成は6と10の卒業生の皆さんです。
当番幹事の学年は、この機会に合わせて、同期会を是非開催してください。

表紙の題字

柏木裕美さん（昭和53年卒）

表紙画「コスモス40」（一部）

兼清仁志さん（昭和47年卒）

感謝することの大切さ

会長　守田　義昭（昭和42年卒）

同窓生をはじめ、関係の皆さん、平素から光潮同窓会に対するご支援とご協力に感謝いたします。

私は、同窓会の目的として、1点は卒業生相互の親睦と交流、2点は卒業生に対する支援、3点は母校と在校生への支援と協力だと考えています。とりわけ、在校生に対する応援に力を注いでいます。

最近の母校の状況につきましては、最近の進学状況の好転、堅調な就職状況、また、近時指摘されていた生徒の服装や態度なども大きな改善が見られ、喜びと期待を感じている次第です。

さて、このたびは、表題の『感謝』について、私の想いを述べてみたいと思います。

私は、ボーイスカウト運動や「小さな親切」運動などのボランティアスタッフとして活動しています。これらのいずれの活動においても、重視されているのが、『感謝』ということです。

来年の夏、山口市きらら浜で「世界スカウトジャンボリー」が開催されますが、これを主催するボーイスカウト日本連盟においても、活動の根幹的な実践項目を示す「ちかいとおきて」に、「スカウトは感謝の心をもつ」と明記され、『感謝』の実行が特に強調されています。

また、昭和38年の東京大学卒業式で、当時の茅誠司学長の卒業生に対するメッセージがきっかけで始まった「小さな親切」運動においても、運動の実践項目を示す「『小さな親切』八か条」の中で、「他人からの親切を心からうけ入れ、『ありがとう』といいましょう」、「人から『ありがとう』といわれたら、『どういたしまして』といいましょう」の2項が明記され、『感謝』の実践が特に強調されています。

もちろん、私自身も、今までの活動において、多くの方との出会いに感謝し、感謝することの大切さを痛切に感じています。

そして、感謝の気持ちを表す「ありがとう」を言葉に出して伝えることが、すごく大切だと思っています。

「ありがとう」、この一言で、多くの場合、雰囲気が和やかになります。

一日何回でも何十回でも、感謝の気持ちを込めて、あらゆる場面で、全ての事柄に対して「ありがとうございます」と言えば、気持ちが和らぎ、素直な気持ちになることができます。

私は、とりわけ、これからの日本を支えていくようになる在校生や若い同窓会員の皆さんに対し、「感謝の気持ち」を持って、感謝することの大切さを心に刻んで日々すごしていただきたいと願っています。

感謝の心を込めて「ありがとう」と、口に出してみると分かります。美しい響きの素敵な日本語ですね。詩人のサトウハチローさんの詩集『ありがとう』の中、『お祝いの詩』の一節を紹介します。

美しいことばは
相手にキモチよくつたわる
ひびきのよいことばは
相手のキモチをなごやかにする

最後に、卒業生の皆さんへのお願いですが、どのようなことでもかまいませんので、母校が少しでもよくなりますよう、忌憚のないご意見やご提案を同窓会にお寄せください。

同窓生の皆さんのますますのご活躍とご健勝を祈念し、結びとします。

ご挨拶

校長　小林　真理

光潮同窓会の皆様、今年も各地から多くの同窓生が集われ、総会が盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。また、平素から母校の教育活動の充実のために、格別のご支援とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、昨年四月の着任以来、様々な場面で「私は光潮同窓会ですよ」と声をかけていただいていますが、先日、昭和五十年発行の光潮会報第一号を読んでいて、光潮同窓会が発足して六十年になることに気付き、改めて歴史の重みを感じています。また、同窓会だけでなく、今の光高にも「光潮」を付した行事が次のようにいくつもあり、在校生のときから同窓会とのつながりを意識する機会になっています。

四月「光潮セミナー（一年生）」

高校生活への期待とともに不安も大きい入学当初に、新しい人間関係づくりを進め、高校での学習の進め方も学ぶ二日間です。

六月「光潮セミナー（二年生）」

キャリア教育の一環として、二年生全員が大学を訪問し、直接大学の様子に触れる貴重な一日です。

十月「光潮講話」

創立七十周年を契機に平成十八年から、卒業生を講師に招いて毎年実施しています。昨年度は松尾清様が「関東に住む四十六年卒三十八人を代表して後輩に告ぐ」と題して、全校生徒に熱いメッセージを伝えてくださいました。

二月「光潮同窓会入会式」

この春は、百六十三名が新会員となりました。今後様々な場面でお世話になると思いますので、よろしくお願いいたします。

また、創立五十周年を記念して同窓会のご尽力で建設いただいた「光潮会館」は、日々の生徒の学習にも、行事や部活動にも大いに活用させていただいています。松下重恵様（昭和29年卒）による実用英語入門講座も、毎年八月に光潮会館二階で行っています。

さらには、「自分たちと同じ光潮同窓会に入ろう」とお子さんの高校進学の折りに話したという保護者の方ともお会いしました。同窓生の皆様が母校を大切に、そして誇りに思い、応援し、期待してくださっていることを痛感しています。

その期待に応えるためにも、今年度は特に次の二点を重視して学校運営を進めています。

一点目は、生徒や保護者、同窓生、来校者等相手の視点に立つことです。生徒にとってこの教室の学習環境は適切か、保護者にわかりやすい情報か、同窓生はどのように捉えられるだろうか、来校者にとって印象はどうか等、これまで以上に意識して取り組んでいます。

二点目は、改善に向けた意識を常にもつことです。日々の授業・部活動から学校行事まで、様々な教育活動を計画・実践・点検・改善のサイクルを意識し、よりよいものにするためにはという意識を強く持ち続けて進めています。

そうした中で、生徒は校風である文武両道の精神を受け継ぎながら、勉学や学校行事、部活動に打ち込んでおり、学校全体が落ち着いた雰囲気の中で光高の新たな歴史を刻んでいます。

今後とも、生徒・教職員全体で活力ある学校づくりに取り組んでいきたいと考えておりますので、同窓会の皆様方の温かいご支援とご協力を引き続きよろしくお願い申し上げます。

支部だより

関東支部から

関東支部事務局長　藤井　政道（昭和47年卒）

卒業生の皆様へ
～上京したら関東支部にご一報下さい～

さて、関東支部の近況報告をさせて頂きます。

「うしお」の抜粋にもあります様に、昨年の総会は直前の台風接近に依り中止となりました。今年こそは大盛会でありますようにと準備を進めております。

4月9日（水）には三役会を開催し、本年度の運営方針を決定致しました。

中原靖生会長

又、5月17日（土）には本年度第一回常任幹事会を開催し、三役会での決定事項について承認頂きました。

又、9月6日（土）学年幹事総会を開催する予定です。

以下に今後の関東支部の日程と「うしお」の抜粋を掲載させて頂きます。

早いもので、平成25年もあと残りわずかとなりました。光潮同窓会関東支部の会員の皆様には、お元気でお過ごしのこととお慶び申し上げます。10月26日（土）に予定しておりました、平成25年度の総会は台風の影響を避けるため中止をいたしました。台風が二つ同時に関東へ接近するとの予報に、事務局長の藤井さん（S47卒）と検討し、中止の決断をしました。結果的に台風はそれて関東への影響は軽微なものでしたが、転ばぬ先の杖、危機管理に万全を尽くすことからの決断です。東京は交通網への影響が大きいことや当日のキャンセルは全額の支払いになること、そして、なにより会員の皆様の被害や怪我などを考えると冷静な判断だったと思っております。来賓の方々や出席を楽しみにしていらした方にはご迷惑をおかけしましたが、何卒ご理解を賜りたいと思います。

また、準備をしていただいた藤井事務局長、景品や販売品の手配をわざわざ光市まで出かけ

関東支部機関紙
「うしお」41号より抜粋

平成25年度 光潮同窓会関東支部総会
ダブル台風の為中止！

てしていただいた松尾副会長はじめ関係者のみなさんに心から感謝申し上げます。

2020年の東京オリンピックが決定しました。私は49年前の東京オリンピックの時は、東京に勤務しており、外国人の道案内をしたことを覚えております。また東京でオリンピックを見ることが出来るよう健康に留意したいと思っております。光潮同窓会関東支部の活動がますます活発になり、2020年のオリンピックイヤーには盛大な総会が開かれることを夢見ております。各位の絶大なるご協力を賜りますようお願い申し上げます。

次回の総会は来年の10月25日（土）を予定しております。奮って参加いただきますようお願い申し上げます。

（中原靖生）

☆事務局からご報告（Ⅰ）

10月26日（土）開催予定の平成25年度総会は、ダブル台風に踊らされて中止になってしまいました。出席予定をして頂いた来賓及び会員各位には、たいへんご迷惑をお掛け致しました。改めてお詫び申し上げます。

松尾副会長は抽選・販売各商品の手配を終え、事務局は百名分のレジュメのコピー・製本、名札の作成等全て準備した後でしたので、非常に重い決断でした。「やれば出来た」とのご批判もあろうかと思いますが、出席予定者全員に確実に連絡を取るには、24日（木）午前中での決定しかありませんでした。悪しからずご諒承下さい。

又、寄贈品・購入品が残っておりましたので《緊急》光物産販売会を11月30日（土）に過去3年間にご出席頂いた方及び学年幹事の方々へご案内をして、いつもの四谷主婦会館プラザエフにて14時から15時30分まで開催致しました。

平成26年度
関東支部の日程

○9月6日（土）12時～
　学年幹事総会
「主婦会館プラザエフ」

○10月25日（土）13時～
　関東支部総会
「主婦会館プラザエフ」

○11月　18時30分～
　第2回常任幹事会
「主婦会館プラザエフ」

＊関東支部事務局ご案内＊

〒164－0012
東京都中野区本町6丁目34番21号
アポロ環境衛生㈱内
事務局長　藤井政道（昭和47年卒）
ＴＥＬ０３（５３４０）３０５５
ＦＡＸ０３（５３４０）３０８８
Eメール　info-b@apollokankyou.co.jp

毎年抽選でハズレた方々に差し上げていた「あおさ」80袋はさすがに量が多く処分に困りましたが、幸い中原会長がお買い上げ下さいました。当日は12名の方々がご参加下さり、予定時刻の15分前に完売となり、閉会致しました。皆様ありがとうございました。

☆事務局からご報告（Ⅱ）

平成15年7月発行の「うしお20号」から編集長を引き受けて頂いておりました、来戸由紀子さん（S47）が同級生のご主人と共に光市へUターンする事となり、平成25年5月発行の「うしお40号」の編集をもって退任される事となりました。後任に現・事務局次長の中村文彦さん（S55）に依頼したところ、快くお引き受け頂きました。この41号より編集長をお任せ致しました。

尚、前・編集長の来戸さんには今年度の総会の場において「感謝状」と「記念品」を贈呈する事になっておりましたが、残念ながら中止となってしまいましたので、上京された折に事務局長より直接お渡し致しました。『来戸さん、長い間ありがとうございました』

編集後記

先日、山口県出身の知人に教わってニュー新橋ビルの地下一階にある『お宝処なかむら』という小料理店に行きました。ここのマスターは周南市出身の中邑さん。山口県の食材が楽しめるお店です。「獺祭」や「雁木」など山口県の地酒ラインナップが充実しています。お客さんには山口県出身者が多いので、隣席の方との間にも話が弾みました。東京で故郷を感じたい方はぜひ！

（S55中村文彦）

感謝状

来戸由紀子殿

貴殿は光潮同窓会関東支部の機関誌「うしお」の編集長として10年間にわたり活躍され、当会の発展に多大なる貢献をされました。
ここに全会員を代表して感謝申し上げます。

平成25年10月26日

光潮同窓会関東支部
会長 中原靖生

平成26年度【関東支部役員名簿】

◎特別顧問　宗内　徳行
　　松岡満寿男
　　西崎　好一（昭和26年卒）

◎顧　問　重岡　健司（昭和27年卒）
　　松岡　純雅（昭和27年卒）
　　近藤　克彦（昭和31年卒）

◎会　長　中原　靖生（昭和34年卒）

◎副会長　古地　昭彦（昭和40年卒）
　　松尾　清（昭和46年卒）
　　大国　邦子（昭和44年卒）

◎監　査　高山　信夫（昭和55年卒）

◎常任幹事　石川　幸恵（昭和29年卒）
　　古閑　宣仁（昭和42年卒）
　　森光　克己（昭和43年卒）
　　大串　正春（昭和45年卒）

［事務局長］　藤井　政道（昭和47年卒）

［事務局次長］　福田　勝洋（昭和49年卒）
　　筒井　俊弘（昭和53年卒）
　　中村　文彦（昭和55年卒）
　　吉村　忠（昭和60年卒）

支部だより

関西支部においでませ!!

関西支部長　鎌田　誠（昭和30年卒）

本年度光潮同窓会関西支部総会は11月8日（土）挙行されます。従来はホテルの宴会場で行っておりましたが、本年は趣向をがらりと変えて〝がんこ（鮨）〟本店で行います。〝がんこ〟は関西では著名な和食、特にお鮨のチェーン店です。

おいしいお酒、そしてお鮨をつまみながら畳の広間でワイワイ。会費もやや安めに設定。女性会員に数多くご参加願いたいことがこのアイデアの趣旨でもあります。是非とも成功させたいと、支部役員一同張り切っております。地下鉄難波駅／高島屋から歩いて2分程度の分かりやすい場所です。

光ご在住の皆さま、大阪浪速の光潮同窓会にいらっしゃいませんか。

本部総会には毎年出席させていただいております。同級生とは、二次会（カラオケ）をも含めてバッチリ絆を深めておりますが、同窓生の方々とも〝ねーさんは、弟はどないしちょる?〟等交流は深まります。故郷の光が、そして光高が身近なものとなる一瞬です。

本年は三回戦で敗退、甲子園の夢はなりませんでしたが、高校便りの〝輝け光〟によれば、生徒諸君が多方面で生き生きと活躍されています。大変心強く思っています。学生時代が懐かしく思い出されるのです。

〝輝け光〟には先生方の御寄稿もあります。何年か前に、数学の先生（小玉昭文先生）が毎週10分間のテストを行っておられました。同感しました。本年5月号には山根　誠先生が〝人生に感動を〟と題されて知識の大切さを述べておられました。W杯サッカーも〝知っておれば〟その感動が大きくなる、京都、奈良の史跡を訪ねても知識があればより感動が増す、知識を身につけて、本や映画ですばらしい感動を味わいなさい、と言っておられます。そして、歴史や地理の学びを通じて、これから出会う世界の人々や訪れる場所の知識を得れば未来が大きく感動するとも言っておられます。

教育の原点に触れた思いでした。

平成26年度 関西支部総会のご案内

◎日時　平成26年11月8日㈯
12：30～15：30
（12：00から受付）

◎場所　「がんこ」難波本店　4階
大阪市中央区難波3-1-15
電話　06-6644-6396

◎アクセス　地下鉄難波駅／高島屋から歩いて2分程度

◎会費　男性六千円　女性五千円
※フリードリンク

＊関西支部事務局ご案内＊

〒530－0041
大阪市北区天神橋3丁目2番13号
大阪謄写館ビル704　有限会社タムラ不動産鑑定内

事務局長　田村周治（昭和41年卒）

ＴＥＬ　０６（６８８１）０９００
アドレス　http://koutyoukansai.hp.infoseek.co.jp/
Eメール　tamura@heart.email.ne.jp

平成26年度総会・懇親会の開催にあたって

「結」～世代を超え、距離を超え、人と人との結びつき～

平成26年度光潮同窓会・懇親会実行委員会委員長　田村　亨（平成元年卒）

光潮同窓会会員の皆様、今年も同窓会の開催時期が近づいてまいりました。今年度は、消費税が初めて導入された年「平成元年度」卒業生が、幹事を務めさせていただきます。

縁あって本年4月1日からは、消費税が8％となりました。我々が卒業した年は3％でしたので、消費税に負けないよう5％パワーアップして誠心誠意皆様をお迎えできるようしっかり準備を進めてまいります。

さて、本年度の光潮同窓会のテーマは「結」（ゆい）とさせていただきました。

「結」の漢字の意味を辞書から引用してみますと、主に結び付けるという類の意味になります。

私も光高校卒業後は、故郷の「光」を離れ大学へ進学しました。その後広島で就職したのですが、縁あって12年前「光」へ戻ってくることとなりました。一旦離れた故郷へ戻ることには多少の不安はありましたが、学生時代の友人や地域の方々の励まし、温かさにふれるうちに、これまでの不安は吹き飛び、現在は故郷「光」に戻ってきて本当に良かったと実感しています。このような経験を踏まえ、私は、家族・友人・知人との結びつきの大切さに感謝するとともに、皆様にも人と人との結びつきを大切にしていただきたいという思いから、今回のテーマといたしました。

光潮同窓会については、これまでなかなか参加の機会がなかったのですが、昨年度、次回実行委員長ということもあり、久々に参加してみました。私たちが卒業した頃は体育館で行われていた光潮同窓会も、今は市内のホテルの一室を利用しており、参加人数も減少しているのだなあと感じました。考えてみれば、私たちの頃は学年360人規模だった生徒数が、現在は学年160人程度まで減少しており、光潮同窓会への参加者が減少するのも当然のことだと思いました。

しかし、私は活力だけは今も昔も変わらないと思っています。参加者が減るから活力がなくなる光潮同窓会ではあってはならないと思っています。

今年度の光潮同窓会は、今回のテーマである「結」の字のごとく人と人との結びつきを大切にした同窓会にしたいと考えています。会員の皆様も、世代を超え、距離を超え参加いただけることを期待しています。私たちも、全力で準備を進めてまいります。それでは、故郷「光」でお待ちしております。

スポーツ指導者鼎談（ていだん）
「グローバルに活躍する選手を育てるために」

歴史ある光高校ヨット部は、今や国際大会でも活躍するほどの成長を遂げています。ご自身も光高ヨット部であり、現在は指導者である中村公俊さんと橋本健太郎さんに、光高ヨット部の現状やヨットの基本・厳しさ、さらにグローバルに活躍する選手の指導などについてお話を伺いました。聞き手は、光高定時制の卓球部などで幅広く卓球を指導しておられる山根猛寿さんです。

――本日はたいへんお忙しい中、時間をさいてお集まりいただき、どうもありがとうございます。ヨット経験のない読者にも理解していただけるよう、いろいろと欲張ってお話を伺いたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

山根　まず自己紹介をお願いします。

橋本　光高在校中は3年間ヨット部でした。平成16年から光高勤務になり、ヨット部顧問として生徒たちを指導しています。授業で教えているのは日本史と政治経済です。

　光高のヨット部は、毎学年3、4人が入部し、3学年合わせて10人ちょっとというところです。多くは高校に入って初めてヨットに乗る生徒ですが、その子たちがインターハイや国体の表彰台に立てるように指導したいと思ってやっています。

　また、光高の顧問をしている関係から山口県セーリング連盟では強化委員長もやっていまして、少年から成年まで幅広く関わっています。23年の山口国体では山口県ヨットチームのお世話もさせていただきました。

　先輩の中村公俊さんには、時々、光高ヨット部員に、より高度で専門的な指導をしていただいています。

裾野の広がりが選手のレベルを高める

山根　では中村さん、お願いします。

中村　大学で4年間活動した後、2年間の山口県体育協会勤務を経て、平成5年から山口県スポーツ交流村（光市光井）に勤務することとなり、当時は高校生を中心に指導していました。ちょうど光高生だった橋本先生たちが私の指導した最初の代です。今は、橋本先生は強化委員長でもあり、指導力があって、自分も橋本先生からプレーヤーとして刺激を受けています。

　指導の方は、幼児～小中学生を対象に遊びのヨットなど、ヨットをツールとした自然体験といいますか、いろんな子どもたちとセーリングを介してつながりを持ちながらヨットを普及させる活動を行っています。

　また、交流村では毎年、「ひかり海っ子クラブ」という海洋体験教室を開き、小学2年生から中学3年生までを対象にした指導を行っています。

　このクラブを立ち上げたのは、光高ヨット部監督としてもお世話になった藤岡悍先生（※）です。私が引き継いで7、8年になるでしょうか。今年はクラブ卒業生から2名、光高ヨット部に入りました。

　ほかにジュニアユースアカデミーもあり、競技力を伸ばすだけでなく、人をたくましく鍛えていく、あるいは協調性やチームワーク、強さとやさしさを育てるという、セーリングが本来持っている教育的な効果について、全国各地を回って講演や海上講習などの啓発活動を行っています。

　もともと自分自身がプレーヤーなので、たまにインターハイを目指している高校生と接すると非常にモチベーションが上がります。ですから時に橋本先生に呼んでいただいて、

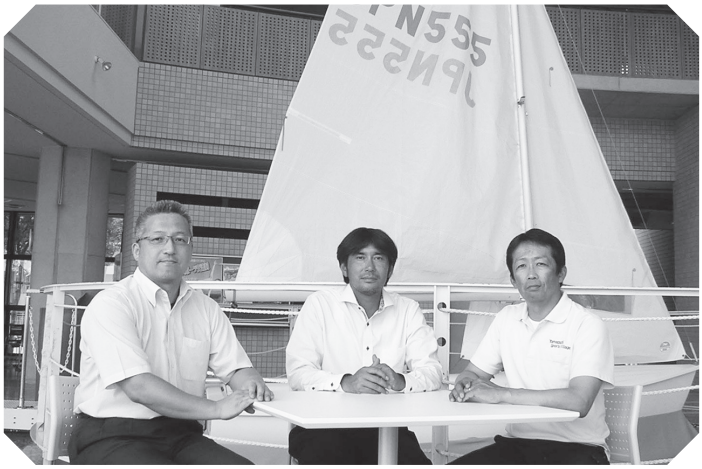
光高生に競技的な指導もさせてもらったりしています。

――次に山根さん、お願いします。

山根　私は中村さんとは同級生で、平成3年に大学を卒業し、光市役所に就職しました。中学、高校と部活で卓球をかじっていた関係で県や市の卓球協会などから要請があり、14年に「光卓球スポーツ少年団（以下「スポ少」と略）」を立ち上げました。現在、スポ少で保育園児から高校生までの25人を指導しています。今年は全国ホープス、全日本クラブ選手権という団体戦2種類と、個人戦の全日本選手権の計3種類で全国大会出場が決まりました。光高の1年先輩の息子さんで、小澤という小学6年生の子が3大会とも出場するなど、今年は光高卒業生の子どもさんが4人、全国大会を経験することになります。

　時期は前後しますが、縁あって光高定時制の卓球部に外部指導者という形で関わるようになったのは7年前です。定時制ですから練習は授業後の夜8時半から9時半までの1時間ですが、平成22、23年と定時制・通信制高校の全国大会で団体ベスト8に入り、24年には個人戦で全国2位になりました。今年も、新入生に力のある子がいて県予選で優勝し、全国大会に駒を進めました。

（※）ふじおかたけし：山口県セーリング連盟副会長。昭和50年に光高社会科教諭として赴任。光高ヨット部をインターハイ・国体優勝に導いた名監督として知られる。



右から中村公俊さん、橋本健太郎さん、山根猛寿さん。スポーツ交流村ロビーにて。　カメラ 小林一登（昭和43年卒）

中村公俊（きみとし）さん（昭和62年卒）
山口県セーリング連盟理事長／山口県スポーツ交流村 スポーツ教室全般担当

橋本健太郎さん（平成4年卒）
光高校ヨット部監督／山口県セーリング連盟強化委員長／山口県立光高等学校教諭

山根猛寿（たけひさ）さん（昭和62年卒）
光卓球スポーツ少年団指導者／光市役所勤務

ヨットは風を受けて走るわけじゃない!?

――ヨットとセーリングはどう違うんですか。

中村　昔はヨットと言っていましたが、ヨットはモーターボートなども含めたもので、セーリングは「水と風の力のみを使って帆走するもの」と定義されますから、私たちが行っているのはセーリングということになります。国際的にも今はセーリングと言うのがふつうになりました。

　セーリングには、主に以下の3種類があります。

ウインドサーフィン：サーフボードに帆をつけたもの。

ディンギー：光高などでふだん指導している小型のもの

キールボート：船底にキールと言われるおもりがついている大型船。10～20人もが乗り込み、世界一周したりする。「アメリカズカップ」などで競技するのはこのタイプ。

　基本的に競技では、海に打たれた目印のブイを何周かして帰ってきます。どう回るかは選手たちが風を見たりして、あそこは風が強そうだから、あそこを通ろうとか、その場で決めることになります。

――風の強弱が見えるんですか。

橋本　風自体は見えません。でも、海は見えます。見ていると、海にも風の強い部分と弱い部分があって、風の強いところには小さなさざ波が立つんです。すると光の屈折が変わって、そこだけ海が黒く見えます。

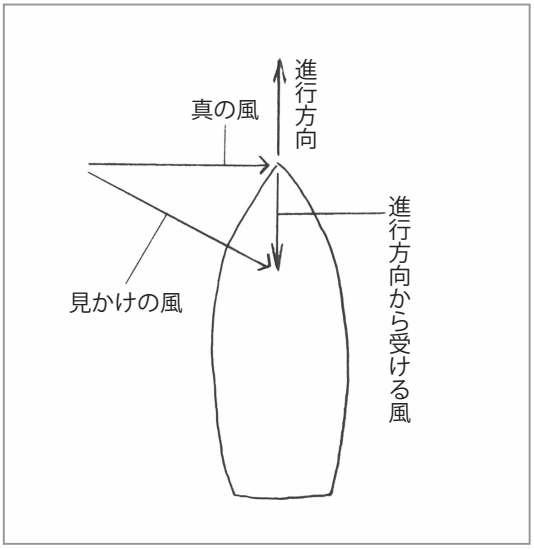
　そういうことを見ながら風を読むことはすごく大事です。

　また、ヨットには「風見（かざみ）」という糸状のものを帆やごく身近なところ

につけて、海の上をどういう風が吹いているかとは別に、自分の舟の上、帆の横をどう風が流れているかを見ます。

この風見が示すのは「見かけの風」と呼ばれるもので、天気予報などで風速何mという場合の風とは違います（図1）。見かけの風は自転車をこいでいるときに感じる風と同じで、ヨットは見かけの風を感じて走らせればいいわけです。

ヨットが風上に向かって進むのを不思議に感じる方もいらっしゃるようですが、帆船とは違い、ヨットは風に押されて進むのではありません。



高橋書店『はじめてのヨット』中迎隆敏著

＜図1＞「見かけの風」と「真の風」

「見かけの風」は「真の風」と進行方向から受ける風を合わせたもの。進行方向からの風を受ける分、真の風より前方から吹いてくる。図のように真の風を真横から受けるとき、見かけの風は斜め前から吹く。ゆえに、例えば見かけの風が真横から吹くとき、風見（かざみ）は真横からの風を示すが、真の風はやや後方から吹いている。

――そうなんですか！

橋本　説明すると難しくなりますが、ヨットの帆は飛行機でいえば翼です。翼に強い風を受けることで生じる揚力が飛行機を浮き上がらせるように、ヨットの帆の膨らみが受ける揚力がヨットの推進力になります（図2）。

――初めて知りました。

橋本　僕たちはこれを「風を流して進む」と言います。原理は飛行機の浮力と同じですから、ハイレベルなセーリング専門家は飛行機の勉強もしています。

――驚きです。

橋本　高校生も最初に説明してびっくりするのはそこです。

「今、風はこっちから吹いていて、ヨットは風に向かって進んでいる。不思議と思わんか」

生徒が「不思議です」と言ったらこっちのもので、「じゃあ、乗ってみるか」ということになるわけです。

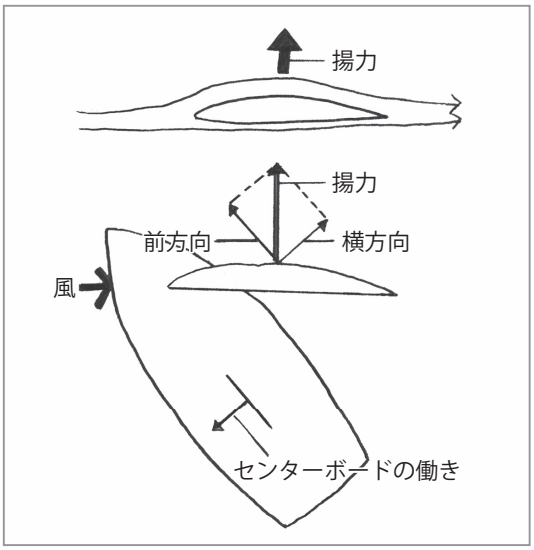
安全のための技術と自立のための厳しさ

山根　昨今のスポーツ指導では避けて通れない体罰の問題について、おふたりはどんなことに気をつけておられますか。海の上という危険を伴う場所では厳しい物言いをせざるを得ないときもあるかと思いますが。

橋本　全国的にも厳しいので有名な光高ヨット部ですし、「橋本はキビシイぞ」で知られていると思いますが、それよりも一番に考えるべきは「海の上で最優先するのは安全」ということです。いざというときになって「危ないから～しなさい」では身を守ることができませんから、言われたことはきちんと聞くという習慣を身につけさせておく必要があります。

特に、ヨットなどの海のスポーツの場合、安全と技術力は比例します。安全に活動しようと思えば技術力を育てないとダメだということです。

さらに、ヨットという競技は、実



高橋書店『はじめてのヨット』中迎隆敏著

＜図2＞推進力は帆の揚力から得られる

飛行機の翼もヨットの帆も、図のように翼の上下、帆の前後を風が流れることにより揚力を得る。ヨットの場合、図の矢印のように、揚力は前方向への推進力と横方向の力に分解され、横方向の力はセンターボードの抵抗で相殺される。このように、ヨットは風による揚力から前方向への推進力を得て走る。

際の試合で監督は指示が出せません。場合によってはレースの1時間以上前に我々の手元から離れ、自分たちでやっていかなければいけないこともあります。そこがヨットの楽しいところでもありますが、自立していないとヨットを走らせられません。

自立するのは大変ですから、そこはかなり厳しく指導します。親御さんにも「そういう視点で子どもたちを見守ってください」とお願いしています。ですから、例えば寝坊して部活に遅れて来たりすると、「親に起こされなきゃ部活に出られないなら来なくていい！」という感じで、こっぴどく叱られることになる。

実際にそれで来なくなることはありませんが（笑）、要は親を頼らずに自分できちんとやれということです。

たまに、僕の目の前で「迎えに来て」などと親御さんに電話する子もいて、当然、「迎えに来てもらわなきゃいけないならやめてしまえ」（笑）。

もともと子どもたちも自分が好きでやっていることですし、高校の3年間が終わって進学すれば親元を離れて独り立ちしなければいけないわけですから、そういうことに関しては常に厳しくやっています。

あとは、どうしても手が回らないこともあるんですが、極力、保護者の皆さんにいろいろなお願いをしないように気を付けています。とにかく自分たちでやるということで、その分、責任をもって、この子たちを一人前にしないと――と言っても、なかなか一人前にはならないんですが（笑）、できるだけしっかり成長させて卒業させたい。教員という仕事だからかも知れませんが、その気持ちはとても強いと思います。

もちろん競技の成績も大事ですが、より高い表彰台を目指してがんばっていくために必要な厳しさは生徒たちを成長させると信じています。

「今できること」をやれば勉強と部活は両立する

――ふだんの練習のスケジュールを教えてください。

橋本　光高は授業が7時限あって、3時55分に掃除が終わります。自転車で坂を下りて、ここ（スポーツ交流村）までが約10分。それから準備して海に出るのが4時半過ぎで、練習後、日暮れには片づけが終わるようにしています。

――冬の間はお休みですか。

橋本　11月ごろから2月中旬まで、ほぼ平日は海での練習はできません、日没が早いので。何しろヨットは転倒する。冬場、いつもの下校時間後に練習を始めると、一度ひっくり返ったらもう帰らなければいけない時刻になります。ですから、海に出られるのは冬休みと土日ぐらいです。

海で練習できないときは体力トレーニングです。ランニングや筋トレなど、ほかの部活と変わりません。

とにかく寒いですから生徒たちも冬の海には出たくない気持ちもあると

モーターボートで指導中の橋本先生。向こうに見えている島影は大水無瀬島（おおみなせ）　カメラ　佐々木啓介（平成13年卒）

思います。でも、彼らはトレーニングするためにヨット部に入ったわけじゃない。ヨットに乗りたくて来ているわけですから、何かの行事の都合で授業が早く終わったときなど、基本的に少しでも時間があれば海に出ます。

――雨や風の日はどうですか。

橋本　風が強くなければ雨でも海に出ます。台風ばりの風でも海に出られるのは中村公俊さんぐらいです。

中村　（笑）

橋本　交流村が休みなのでヨット部の休みは水曜日と決めてあります。ですから基本的に大会が近かろうが水曜は休みです。子どもたちは大会が近付くと水曜も練習したいと言いますが、「最初から水曜は休みと決めてある。そのつもりで計画を立てて練習しなさい」と言ってます。

　僕も教員なので、「ちゃんと勉強しろ」「こんな点数じゃ卒業できんじゃないか」と言うことになる。現実問題、生徒は勉強と部活でけっこうハードですから休みと決めた水曜は休みます。勉強するときはヨットには乗れないし、ヨットに乗っているときは勉強できない。要するに、やらなきゃいかんことは、それができるときにきちんとやれということです。

――野球などでは生来のセンスや素質が関係すると言われますが。

橋本　それはヨットでもありますが、素質のある子が必ずしもよく伸びるかというと、そうとは限らない。

――努力が関係する？

橋本　そうですね。小嶺忠敏さんという有名な高校サッカーの監督は、「練習は量と質と情熱、この3つの掛け算だ」とおっしゃっています。ヨットも同じだと思います。もちろん素質の差はあるんですが、それは努力で覆せるというのが僕の基本的な考え方です。高校に入って始めた子が、小さいころからやっていてセンスもあるという子もいる中で少しずつでも結果を出せるのは、そういうことじゃないかと思っています。

　光高の子たちは、素直で辛抱強くて頑張る子たちです。面と向かっては決して言いませんが（笑）。その頑張りが最後には勝つんだということを信じて自分たちはやっている。そういう思いはすごく強いです。

個性に合った厳しさが育てた飽くなきポジティブ・スピリット

山根　おふたりが藤岡先生の指導から得たものなどをお聞かせください。

橋本　僕は小学生のとき、今、中村公俊さんが子どもたちを教えているように小4～6年まで3年間、週に1回くらい藤岡先生に教わりました。

　中学の間はヨットから離れていましたが、光高でヨット部に入り、また藤岡先生の指導を受けました。

　先生自身はヨット経験者ではないんですが、僕だけでなく、中村さんも同級生たちもみんな、いろんな意味でとても影響を受けたと思います。

　まず藤岡先生の言うことはいつもスケールが大きい。僕たちが中国大会に出てインターハイの切符を取ろうと必死のときに「世界を目指せ！」なんて言うんです（笑）。言われて「う～ん」とも思いつつ、「先生、僕たち、今はそれどころじゃないんです」（笑）。常にこんな感じでした。

　言葉で表現するのは難しいんですが、昔から「できないこと」は挙げられませんでした。いつも「もっとできるだろう」と言われて、それを信じ込まされたような気がします。

　だから今はこの「もっとできるだろう」の発想が僕自身の中にもあります。何かをやるとき、それができない理由を挙げるのは簡単じゃないですか。そうじゃなくて、自然に「どうすればできるか」と考える、そういう思考回路を植え付けられたと思っていますし、子どもたちにも、そういう接し方をしています。

　部員には「光高のヨット部が厳しいのは、何よりも僕が最後まで諦めないからだ」と話します。「この子の力はこれぐらいだから、ここまで行けばいい」と思ってしまえば生徒たちももう少し楽でしょう。でも「なぜアイツにできてオマエにできない？　何かするのに人より時間がかかるのなら早く取り掛かったらいいじゃないか」と言わずにおれない。

　問題は「これからどうやっていくか」です。とにかく後ろ向きは好きじゃないし、考えるのは「物事をどうやって達成するか」なんですね。

僕も藤岡先生からそういうことを求められてきたんだと思いますし、今は生徒たちに同じことを求めています。だから生徒たちが変なことをやっていても、自分なりに考えてやってる場合は口を出さずにやりたいようにやらせますし、そうじゃないときはこっぴどく叱られる（笑）。

いろんな意味で藤岡先生からは非常に影響を受けました。先生らしくない先生だったかな（笑）。

山根　中村さんはいかがですか。

中村　私はさんざん甘やかされて育ってきた子だったと思うんですが、藤岡先生から、男は戦わないと生きていけないこともあると学びました。

思い起こしてみると、先生には必要な時に必要な言葉をかけてもらいました。失敗の連続だったんですが、そのたびに「また次にやろうか」というような、印象深い、いいアドバイスをもらっていたと思います。

今の光高ヨット部もそうですが、私たちもインターハイのチャンピオンを目指していたんです。でも橋本先生も私もチャンピオンにはなれませんでした。試合に負けて、さきほどの橋本先生の話のように、どうしようもなく悶々としているわけです。そういう時には選手と監督の関係も質が変わるだろうと思うんですが、そういう区切りのとき、いつも、「おまえ、それで終わりじゃないだろ」というような、次につながる言葉をかけてくれるんです。

そう言われると、自分のくやしさをわかってもらえたというか、「そんなもんじゃないだろ」と先生が言う通りに思えてくる。そういうのが上手な先生でした。

いろいろ指導を受けたわけじゃなくて、自由にやらせてもらいながら、要所、要所で、たまに落とされ、たまに持ち上げられて今に至る、という感じですね。

橋本　僕は大人になっても叱られているので（笑）。

――それはどういう？

橋本　叱られるというか、常にけしかけられるんです。例えば僕が「指導者として、こういうことをしたい」と話しても先生は「うん、わかった」とは言わない。「そうやって、その選手はどう伸びる？」と返されます。

相手によって違う接し方をしているとは聞いていましたが、僕はすぐにカチンと来るほうなので、藤岡先生に言われると、「クソ！　見とけよ」となる（笑）。そういう意味でけしかけられてきたと思います。

さっき公俊さんは「持ち上げられた」と言っていましたが、僕は持ち上げてもらった経験はない（笑）。

中村　それぞれの個性に合わせた言い方をされてたんでしょう（笑）。

一同　（笑）

中村　落とされることがほとんどで

ヨットを囲んで練習の準備。

風が強い日の練習中。手前が期待の小泉唯吹選手。

陸に向かって進む。

すから、ごくたまに「おまえはすごい」みたいな認められ方をすると、やけにうれしかったです。

橋本　そういう経験はないなあ（笑）。

一同　（笑）

中村　人前ではそういうことを言われたことはないね。

橋本　社会人になってから飲んだ時に一度、「オマエに厳しく言うのは、オマエが敏感に反応するからだ」と言われたことはあります。敏感というのは、さっきも話したように僕がすぐカチンと来て「見とけよ」となるところだと。だから厳しく言われるんだと信じてきました。かなりつらかったですけど。公俊さんが言っていたように、藤岡先生と戦っていたところもあるかなと思います。

「光高から世界を目指す」のはもう夢じゃない

橋本健太郎さん

山根　世界を目指すグローバルな選手に育てるために伝えたいこと、ご自身の信条などをお聞かせください。

橋本　僕自身はグローバルじゃないですが（笑）、まず、子ども自身が「やろう！」と思わないと始まりませんし、先ほどから何回も話に出ているように自立してやっていけるようにならないとダメだと思います。

　具体的には、昨年、2年生の小泉唯吹（いぶき）が初めて、スペインはバレンシアの世界選手権に出ました。僕もいっしょに行って見て来たんですが、世界はすごく近いようにも、すごく遠いようにも感じられました。というのは、自分たちがずっと地道にやろうとしてきたことを、より高い精度で確実に突き詰めていくのは果てしなく大変な作業だなあと思いましたが、逆に、自分たちのやっていることが間違いではないから貫き通していけばいいんだとも思いました。きちんと自立し、まわりに左右されず、自分の力でやり抜いていく。そういう基本的なことが世界に出ても大事なんじゃないかと、世界大会を見て思いました。

中村公俊さん

――世界選手権などに出場するには、どんな予選を勝ち抜くんですか。

橋本　種目によって違いますが、約半年かけて日本各地で予選があり、その戦績によって割り振られていきます。今年もポルトガルの世界選手権予選が3月に和歌山であり、1チームのみの出場枠を獲得しました。

――ライバル校は？

橋本　強いのは西日本、特に九州でしょうか。県で言えば福岡や佐賀は強力です。愛知や神奈川も強いです。

　県とは別に、私学で強烈に強いところもあります。私立が力を入れると道具を使う、つまりお金をかけます。小さな1人乗りのヨット一隻を一揃いそろえると70万円くらいかかりますから。帆を修理したりしながら公立でがんばっているのはうちと佐賀ぐらいではないでしょうか。

――海外遠征のときのヨットは？

橋本　国内の試合には自分たちのヨットを運んで行きますが、海外の場合はその国で借ります。

――遠征費用もかかりますね。

橋本　昨年も光潮同窓会にはいろいろな支援していただきました。今年も頑張っていますから、どうぞよろしくお願いします。

――後輩が頑張っているのに費用不足で負けたのではかわいそう。

橋本　ヨットもなかなか高いんですが、学校も理解があり、いろんな方々に支援していただき感謝しています。

　ただ、「これしかない」と思うと子どもたちも大事に使うんですが、いいものが揃ってくると扱いが雑になりやすい。今も、「いかんなあ」と思っているところです。

　だいたいうちは、自分たちで帆が継ぎはぎだらけになるほど修理してやってきました。そういう子たちが本番でも力を発揮してきたんですが、今年、ちょっと心配なのは、そういう苦労をしていないことです。ひとつが良くなると、別の課題が出て来るものですね。

山根　現在の夢は？

橋本　光高ヨット部卒業生がオリンピックのメダリストになることです。２０２０年の東京オリンピックは、ちょっと若いですが小泉唯吹がメダルを目指すチャンスと思っています。

　ただし目の前に一人ひとりの子どもたちがいますから、それを放ったらかしては面白くない。もちろんオリンピック出場も夢ですが、どの子も全国大会を目指して立派に成長して卒業してほしいですし、目の前の一人ひとりの子どもがしっかり成長して自己実現していくこと。うれしい感情もですが、負けてくやしい思いが渦巻くような、感情の持っていき場がなくて自分の中でうめくような体験もさせてやりたいと思います。

　卒業後も続けるのは難しいんですが、できるだけ多くの子が大学や社会人としてセーリングを続けてほしいですし、続けることはできなくても、大会時など、このスポーツ交流村に応援に来てくれたらと思います。

ヨット部を起点に さらに光高を盛り上げよう！

山根　では最後に、光高をどのように盛り上げていきたいか、それぞれの思いをお話し願えますか。

――全県学区が始まりますし、大学進学の結果だけでなく、光高全体のイメージがよくなればいいですね。

山根　我々の世代は、例えば光市から徳山高校に行くには学区外ということで生徒数の５％内という枠がありました。それが平成14年から周南学区に広がり、光市の成績優秀な子が徳山高校などを目指すようになっています。28年度の入試で全県学区になると通学区域は県内全域です。その中で、光高を目指そうと思わせるものがあるといいんですが。

橋本　「光高といえばヨット」と言っても、入学した子が皆、ヨット部に入るわけでもありません。でも光高は「頑張ろう」と思えばできる学校であり、そのいい例としてのヨット部をもう少しうまくＰＲできればいいんですが。

山根猛寿さん

　文武両道はどの高校も同じで、改めて言ってもインパクトは小さいでしょうが、実際に光高は、少しでも頑張ろうと思う生徒ならできる学校なんだということを、我々教員も、もう少ししっかりＰＲしていかないと、と思っています。

　光高の子は――僕は生徒指導を担当しているので叱ってばかりですが（笑）――真面目ですし、ちゃんと取り組めばできる子たちです。だから勉強も部活も頑張っていこうという気持ちが生きるようにしてやりたい。例えば光高のホームページでも、大会で優勝した、何位だったというだけでなく、日々頑張っている生徒たちの姿が見えるようにできればと思います。

――中村先生、最後にコメントを。

中村　私の言いたいことは全部、橋本先生が言ってくれました（笑）。

山根　今、県のセーリング連盟は入る光高同窓生率が高いですね。

――それは伝統的なものですか。

中村　今は私が県セーリング連盟理事長で、いっしょにセーリングをしていた世代が中心的な指導者になって、現場で強い選手を育てています。

　強い選手とは、競技で良い成績を出せるだけでなく、強い人間でもあると思います。人間は強くないと人にやさしくできませんし、他人の良さを認められず、自分の弱さも認められません。強い人間が社会を活性化し、社会をよくすると思うんです。

　「人間を強く育てる」というセーリング競技の素晴らしさ、有益性、そして橋本先生が育ててくれている強い人間――そうしたことを、私の立場から、どれだけ発信できるか。それが、やがて、光高のヨット部員が増えたり、橋本先生の公私にわたる活動がスポットライトを浴びることにつながるかなと期待しています。

――次世代、次々世代を育てるのは、同窓生先輩として、また大人としての責任でもあります。中村さん、橋本先生、山根さん、どうぞ頑張ってください。今日はどうもありがとうございました。

（談／まとめ　昭和47年卒 来戸）

「今も日曜は朝6時から草野球を楽しんでいます」

2年連続甲子園出場ピッチャー　前田夏樹さん（平成7年卒）

光高野球部に、唯一の二年連続甲子園出場をもたらしたエースピッチャー。18年経った今、当時を振り返ってお話しいただきました。

甲子園にいい思い出なし!?「最低でもベスト8」のプレッシャー

Profile　まえだなつき。平成７年光高校卒。平成５，６年と２年連続で甲子園に出場。ピッチャー。特に２度目の出場を果たした３年時は山口大会から全試合を完投した。現在は博多在住。夢は「末子の男の子と酒を飲むこと」という、（上から順に）２女１男の父。

少年野球に始まって、37歳の今まで、ずっと野球をやってきました。ですから、間違いなく野球は好きなんですが、練習は嫌いで、特に光高時代は練習がきつくて、やめたくて仕方がありませんでした。

そもそも野球部に入ることは光高を選択した目的のひとつでした。当時、光市の中学校で野球の強い生徒は、野球推薦で近隣の下松工業とか柳井商業など甲子園出場回数の多い高校に進んでいました。それが、「炎のストッパー」として知られる故・津田恒美投手を南陽工高野球部時代に甲子園に導いた坂本昌穂（まさほ）監督が光高野球部に来ておられた。坂本監督率いる野球部を目指して市内の力のある球児が光高に集まったときでした。

「甲子園にいける！」という感じはあったのです。

思い出すのは、２年生だった年の7月に津田選手が亡くなったとき、僕が津田投手のファンだったこともあり、県大会が始まる前に坂本監督と2人でお墓参りに行ったことです。

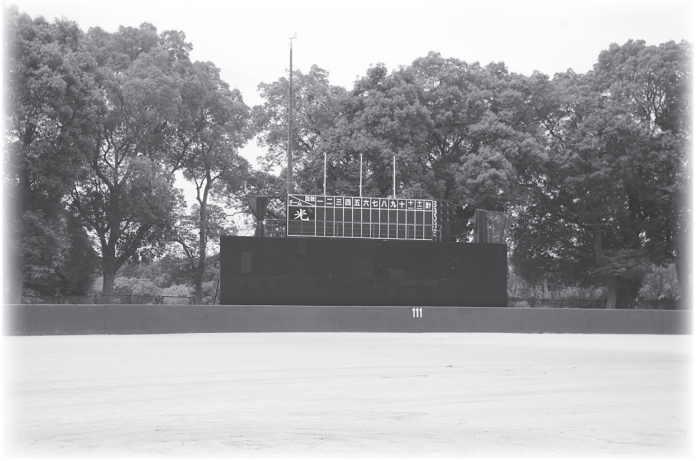
この年は2年続いた甲子園出場の1年目でもあり、もちろん先輩たちも頑張ったし、ほかのピッチャーもいて、流れに乗って山口大会は勝ち進みました。甲子園では1回戦に4対2で負けましたが、甲子園に出たことだけでうれしかった。

でも今、甲子園の想い出は？　と

聞かれると、正直言っていい思い出は全くないような気がします。

もちろん、当時、先生方も含め多くの人に応援してもらったことは、とてもありがたかったですし、すごく感謝しています。ただ、1人で投げた2年目は、周囲の期待、プレッシャーがすごかった。連続出場する甲子園では「最低でもベスト8」だと言っていました。

そういうわけで、「きちっと勝って野球部をやめよう」と思っていたんですが……現実は厳しいですね。結果は前年と同じく4対2で一回戦敗退。「甲子園で一勝もできなかった」ということが一番強く残ってしまいました。



現在の光高校の野球場

練習ぎらいにランニングぎらい。楽しみは「こっそりデート」と仲間と食べたラーメン

結局、負けたのにやめなかったのは野球が好きだったからです。が、練習は嫌い。特に光高時代はきつかった！　もう、つらくて、つらくて。あまりにも練習がきつかったので監督を「コロシちゃろうか」と思ったこともあるくらいです（笑）。

遊びたいさかりなのに練習、練習の毎日。そもそもピッチャーといえば、人一倍、走らなければいけないのに僕は走るのが大嫌いなんです。

チームで一番わがままで傍若無人。3年になってからは居残り練習も早朝練習もほとんどやってないでしょう。思い出すと反省することばかりです。キャプテンやチームメイトにも迷惑をかけたと思います。

もうひとつ。当時の野球部では男女交際禁止ということになっていました。そのくらい集中しないと勝てないということだったんだと思います。実際、交際を見つかって付き合いをやめさせられた部員もいました。僕もバレてしまって、監督には「（交際を）やめます」と言いつつ、実はやめずに付き合っていました。申し訳ないですが、それが励みになっていたところがあります。

楽しみだったのは、その彼女とコソッと会ったり、試合や土曜の練習のあとなんかにラーメンを食べに行ったりしたことです。

光井の、「珉珉（みんみん）」じゃなくて何とか亭というラーメン屋だったと思います。光高から坂を下り、室積方向に進んで188号線を渡ったあたりにあったと思います。今もあるかなあ。

当時、監督はとても怖かったです。でも卒業後は、折々に監督のご自宅にもお邪魔させてもらいました。結婚後も、自分の勤務地が防府市、監督が徳地（山口市）にいて近かった時期には、よく家族で遊びに行かせてもらったりしました。

そう言えば、高1の時は、まだ「練習中には水を飲んではいけない」という規則（?）も残っていました。そんなの、ガマンできるわけないの

で、トイレに入って飲んだりしていましたが（笑）、3年生が抜けると自然になくなりました。害ばかりで効果なしといえば、親の世代の人なんかに聞くと昔はずいぶん「うさぎ跳び」をやったそうですね。僕たちのころはもうやっていませんでしたが。

今は男女交際禁止なんてことはないでしょうし、炎天下、水も飲まずに練習するようなことはありえませんが、その分、昔の人の方がタフな気がします。今の子はちょっと軟弱というか、すぐ倒れるような印象がありますね。

遠くなっても消えない光との「縁」

大学進学では「とにかく楽しく野球をしたい」と考えて、推薦で強い選手を集めるような大学は選ばず、ふつうに受験して西南学院大（福岡市）に進みました。

西南野球部は、今は強くなりましたが、当時はそうでもなく、大学の職員が監督を兼任しているような野球部でしたから、僕の狙い通り、自分たちでどう練習するか、話し合って決めたりしながら楽しく野球ができました。

大学を卒業して、野球で入社した会社の野球部は、残念ながら入社後3年で廃部になってしまいました。その後、何回か合併などがあり、今年の一月にも社名が変わりました。まさかこんなことになるとは、という感じです。博多に来て7年、そろそろまた転勤があるかも知れませんが、ある程度、流れに身をまかせるしかないかなと思っています。

ずいぶん前に両親は郷里だった島根に戻りましたし、光は高速道路で通過するくらいしか縁がなくなってしまいました。同級生の結婚式に呼ばれても野球の試合と重なって行けなかったり。お互いにそれほどマメに連絡を取り合うタチでないこともあって、野球部仲間ともあまり交流のないまま来ました。

とはいえ、光とのつながりが切れたわけでもなくて、社会人野球の試合には、坂本監督に紹介してもらった松村邦洋さん（田布施町出身）が、よく応援に来てくれました。松村さんやほかの方たちといっしょに、監督主催の食事会に招待されたこともあります。

また、博多に来る前は東京にいましたので、光潮同窓会の関東支部総会に出席して大先輩たちの前でスピーチさせてもらい、作家としても有名な室積 光（ひかる）さん（本名・福田勝洋さん、昭和49年卒）にもお会いしました。

昨年末には、10数年ぶりに光で開かれた同期会に出て、その続きで野球部の仲間でも集まりました。とっても懐かしかったです。

久しぶりに来てみると、空の広さは相変わらずでしたが、光駅周辺にもホテルが建っていたり、ずいぶん変わったなあと思いました。

後輩のみんなへ「楽しみをみつけながら頑張れ！」

今もずっと草野球で楽しんでいます。草野球はいいですね、練習なしで試合ができますから（笑）。身体が動く限り、草野球は続けたいと思っています。

このところ、日曜の「早朝野球リーグ」（目下11チーム参加）に出ています。シーズン中はほぼ毎週、日曜の朝6時から試合です。これだと朝9時には帰宅できるのがいいんです。子どもたちがぼちぼち起きたところに帰宅する、という感じになりますから。

ゴルフもやっています。これは仕事上の接待のため、というのがスタートでしたが、なかなか上手くならないところが面白い。これも楽しんでできるスポーツとして続けたい

7月6日早朝草野球にて。この日は2対0で勝利

と思っています。

さて。今日も光高校野球部の後輩たちは甲子園を目指して頑張っていると思います。

僕のようなわがままは勧めませんが、つらい・苦しいのをガマンするばかりではなくて、自分なりの息抜きや楽しみを見つけることも大切だと思います。楽しみがあって、だからこそ苦しみを乗り越えられるということもあると思うんです。

僕たちのころは、まだ、そういうことができにくい雰囲気があったような気がします。でも、今はスポーツ全体が「楽しむ」ことを大事にする方向に変わっていますし、あのころのように厳しくはないと思いますから、ぜひ楽しみながらやって欲しいですね。

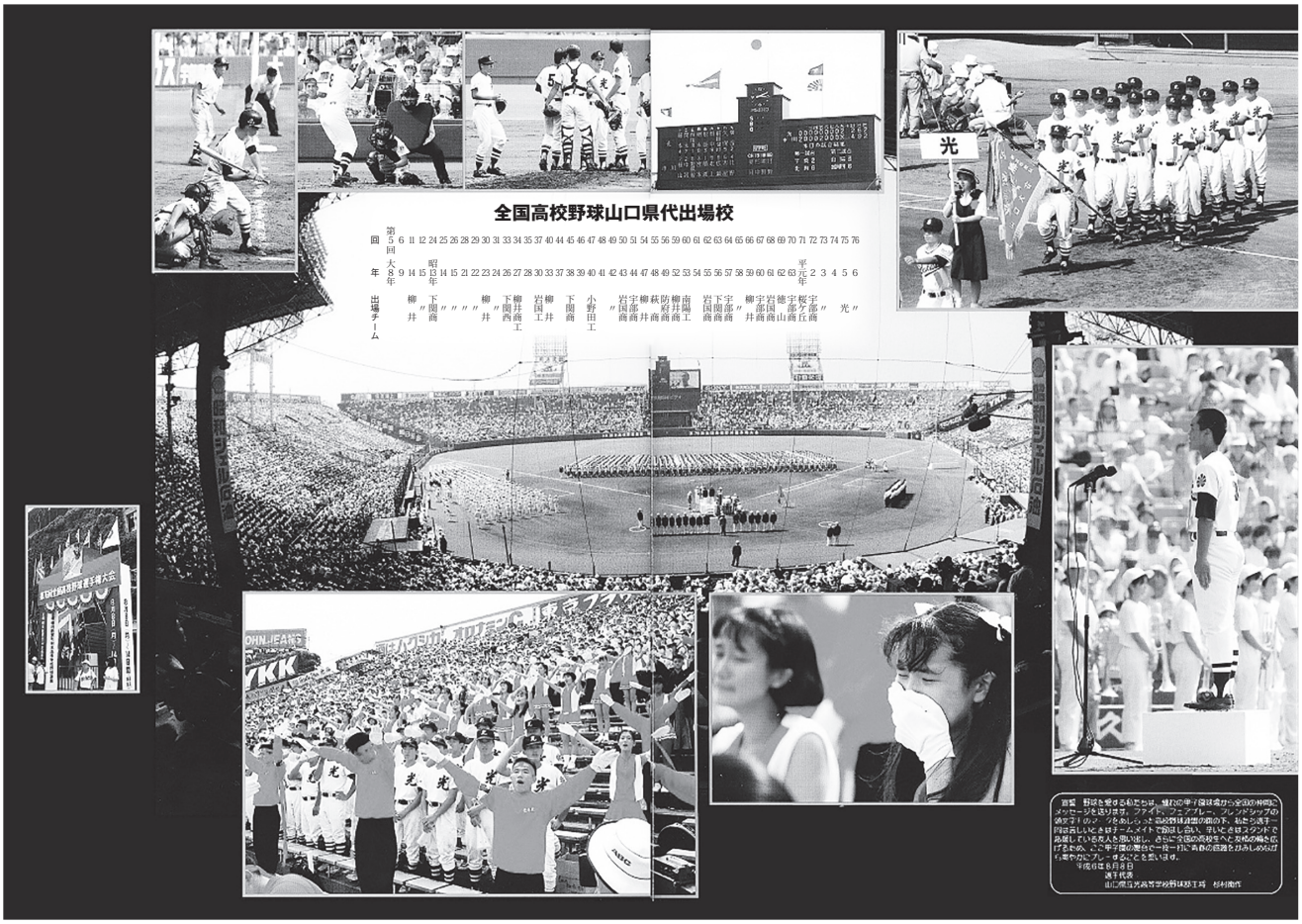
野球部だけではないと思いますが、光高野球部で経験した上下関係は社会人になってみると、ずいぶんプラスになっています。上下関係のようなものは敬遠されがちですが、そういう経験があってこそ、仕事でも、相手への気配りや、周囲を見る目を養えたのではないかと思います。

チーム一わがままで皆に迷惑をかけた――あとになって、そういうことに気づかせてもらったことも、野球で得たことのひとつです。

一番、よかったと思えるのは挨拶です。今はびっくりするくらい挨拶できない人が多いんです。挨拶がしっかりできないとコミュニケーションの幅が狭くなりますし、それはさびしいことです。たぶん、大きな声で挨拶を交わすような環境で育って来なかったんだろうと思います。だから、相手が先輩でも上司でも簡単に無視するんです。

野球ではそんなことは許されません。おかげで目上にも目下にも何も構えずに自然に挨拶できますし、営業でもすごくプラスになります。これも、野球をやってきて身に付いた、とても大きな収穫だったと思って感謝しています。

（談／まとめ　昭和47年卒 来戸）



平成６年度卒業アルバムより。数々のシーンに、あの時の感動が蘇る

平成25・26年度　光潮同窓会役員

職　務	氏　名	卒	担　　当	職　務	氏　名	卒	担　　当
顧　問	小林　真理		光高校校長	幹　事	岡村　欣昌	S61	組織・会則　全日制PTA会長
顧　問	河津　和之		光高校事務長	幹　事	芳岡　　統	S62	広報
顧　問	小林　信行		光高校教頭	幹　事	山根　猛寿	S62	広報
顧　問	沖田　道世		光高校教頭	幹　事	濱岡　正美	S63	広報
会　長	守田　義昭	S42		幹　事	小野美智恵	S63	広報
副会長	小林　一登	S43	◎広報	幹　事	松並　宏昌	H 2	広報
副会長	富田木綿子	S54	広報	幹　事	佐々木孝高	H 3	広報
副会長	田中　謙史	S61	企画・運営	幹　事	北川　宣孝	H 8	広報
幹　事	市来健之助	S32	◎企画・運営	監　査	泉屋　　孝	S35	
幹　事	酒井　隆行	S35	◎組織・会則	監　査	小林　敬典	S45	
幹　事	木村　幸子	S37	企画・運営	事務局	宮秋　孝史	S57	
幹　事	松尾　尚慈	S39	企画・運営	事務局	橋本健太郎	H 4	
幹　事	大川　博幸	S43	○広報	事務局	佐々木啓介	H13	
幹　事	兼清　照久	S45	組織・会則	事務局	鍵山　景子	H18	
幹　事	河村　幸昌	S47	組織・会則　野球後援会会長	事務局	水上由美子	H 2	
幹　事	来戸由起子	S47	広報	事務局	沖田　道世	S55	
幹　事	木村　則夫	S49	企画・運営				

◎部長　○副部長

編集後記

私が広報担当になり編集後記を書く時、その年の世相に少し触れることにしている。

今、世界はきな臭い。ある作家が戦前の雰囲気を感じると話していた。戦争を知らない世代が主流となっている今、平和が美しいことをどれだけの人が感じているだろうか。

さて、「光から世界へ」、母校の後輩たちは世界へと羽ばたいている。ヨットの世界大会での快挙、私たち卒業生は大きな拍手を送りたい。

一方目立たないところで後輩たちは地道ではあるが日々研鑽に努めていると思っている。

定時制のクラブ活動も全国大会で活躍している。

素晴らしい指導者がいて可能になるのでは。

そしてこの「光潮会報」今年の出来は如何ですか。K女史という「強い味方」が現れ編集をリードしてくれたおかげで刷新された内容となった。

光高等学校が素晴らしい学校だと誰からも認められる、その為に先輩として何が出来るか、何をしなければいけないのか。

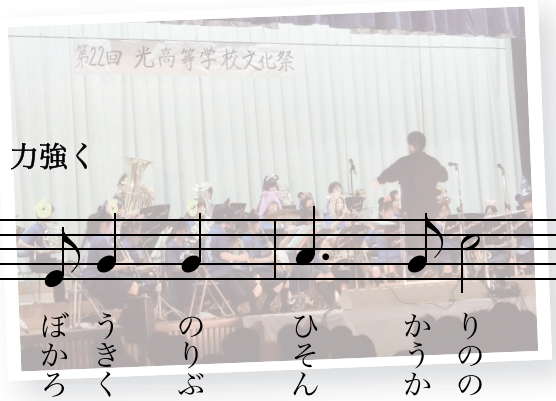
その一つに光潮会報誌があるのではと考えている。

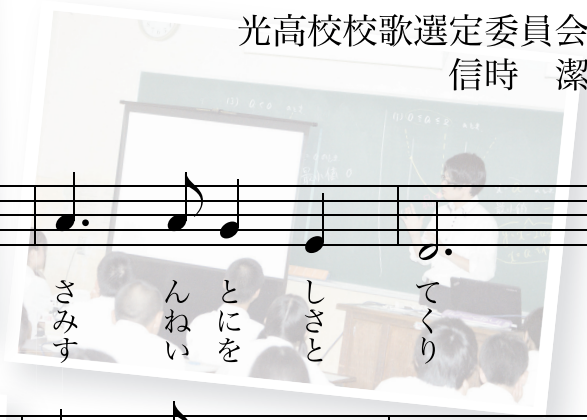
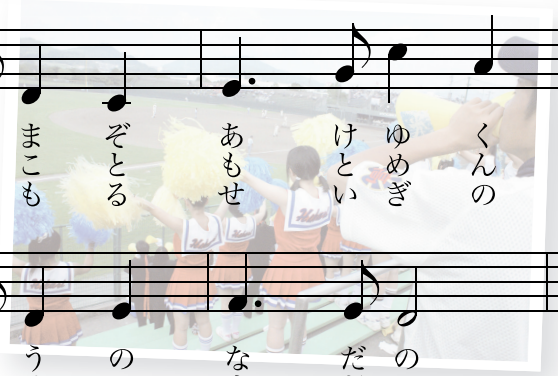
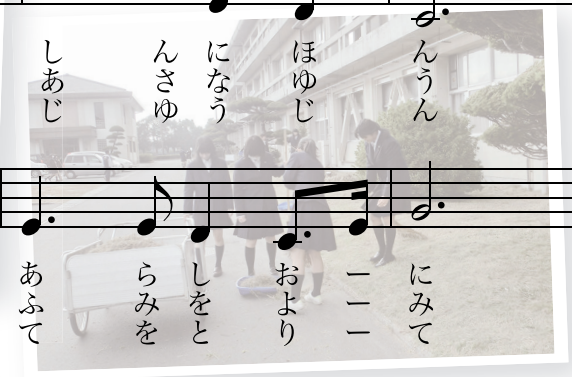
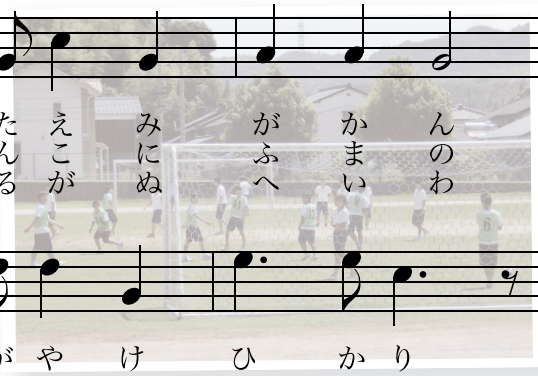
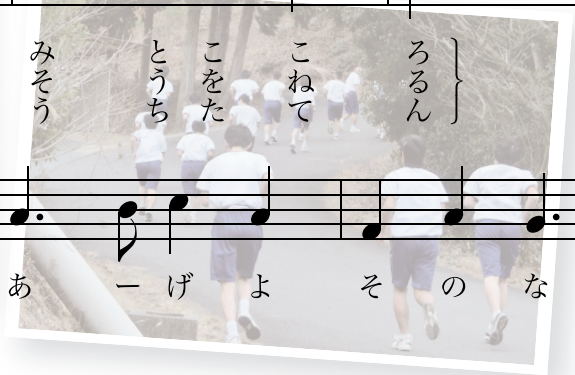
微力かもしれないが、継続して母校の良さを伝えていきたい。

同窓会広報部長　小林一登（昭和43年卒）

山口県立光高等学校校歌

光高校校歌選定委員会　作詞
信時　潔　作曲



♩=108 ca.　力強く

mf

1. きたひ　うきく　のりぶ　ひそん　かうか　りのの　さみす　とにを　んねい　しさと　てくり
2. いまま　ーー　まこも　ぞとる　あもせ　けとい　ゆめぎ　くんの　しあじ　んさゆ　になう　ほゆじ　んうん
3. すけし　おいか　うせい　のつの　なまと　だども　のにと　あふて　らみを　しをとる　おより　ーーー　にみて

f

きせゆ　たんる　えこが　みにぬ　がふへ　かまい　んのわ　みそう　とうち　こをた　こねて　ろるん

か　が　や　け　ひ　か　り　あ　ー　げ　よ　そ　の　な

わ　が　ま　ー　な　ー　び　や　に　さ　ー　か　え　あ　れ

発　行　山口県立光高等学校光潮同窓会
山口県光市光井 6-10-1
TEL　0833-72-0340（光高等学校）

印　刷　中村印刷株式会社